

おぼえてる、911？



<http://septemberrising.org/>

昨秋の同時多発テロに反応して、世界の音楽家たちが動いた。その成果であるCDの発売がいよいよ目前に近づいた。インターネット時代ならではの新しい形のチャリティ・プロジェクトである。
(次号、参加アーティストのインタビュー掲載予定)



第2巻第2号
通巻第38号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 ☎166-0004 からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

私が小さい頃、うちのすぐそばをバスが通っていた。近所に古くから住むものなら誰だつて知っていることである。と思っていたのだが、先日、この話題が出たときに、中学校の同級生が「それは知らなかった」と言い出した。彼の家と私の家とは、直線距離にして、ざっと五百メートルほど。たつたそれだけしか離れていない。彼の記憶力に問題があるのではないか、という疑いもなくはないけれど、小さい頃の彼のテリトリーにうちの周辺は含まれていなかったのだ、というのが実際のところだろう。

件の彼は中学校の同級生ではあるけれど、小学校の同級生ではない。このことも大きな要因かもしれない。小学校の低学年だった頃には、他の学区まで出勤するようなことはあまりないものだ。たまに出勤することがあると、どことなく普段とはちよつと違う緊張感があったもの。ちよつとした冒険。ささやかな文化の衝突の可能性を無意識裡に感じ取っていたのだろう。

通学区域という、文部省によって設定されたであろうエリアは、小学生に対して大きな影響力を持つ。近頃では学区という制度も漸く幾分柔らかになってきたけれど、当時の制度は硬直したものだ。エリアの周縁に住む人たちは、就学と同時にふたつの(あるいは、それ以上の)異なるグループに分けられる。例えば、大通りや大きな川が境目になっていけば良いのだけれど、例によって、お上のやることであるからして、多分に恣意的な

分け方となる。私が在学中の六年間にも、何らかの理由で通学区の見直しがあつて、周縁の少年少女たちは転校するかどうかを迫られる、というような事態が発生した。大人にとつてはどうかということはないことかもしれないが、当該の小学生にとつては人生の岐路と呼んでも差し支えないような、大きな問題であつた。

例えば、海というものは、かなり大きな境目である。大きさにもよるけれど、川も境界として機能することが多いだろう。ある程度以上の山があれば、向こう側とこちら側では違う世界になるのも当然だ。このような自然環境によって区切られた範囲で、集落が存在し、将来は国に繋がっていく集団が発生していったはずである。そして、そこには固有の文化が存在しただろう。

そういう自然環境によって与えられた境目ばかりではない。十年と少し前までは、壁によってふたつに隔てられていた国があつた。正確に言えば、壁そのものというよりは、暴力によって隔てられていたわけだが、孰れにせよ、不自然な形で分けられていたのはまちがいない。

不自然な形といえば、逆のケースも生じている。EUである。乱暴に言えば、異なった文化の国々を一塊のつもりでやつていこう、というような考え。ユーロの実用も始まった。これが、世界をひとつに纏めよう、というコスモポリトな発想のものな

(最終面に続く)

今日の紙面から

- 二面(ソウル・国際面)
- 松本と話そうピンポンパン
- 三面(芸術面)
- レイズギャラリー
- 四・五面(からすライブラリー)
- 本『いづく物語』
- ©DD CONTRASTENSO
- 映画『エトワール』
- 六・七面(文芸面)
- マウスの庭



からす新聞は××××

が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できません(無茶じゃない範囲で)。

松本と話そっぴんボンパン

今頃、ジョージ。

そう、ジョージ（ハリスン）が死んだのは去年の十二月のこと。やっぱり、ジョージだったのは、またまた、最後も影に隠れたこと。日本では「愛子さま生誕」ニユースに完全に持つていかれていた。

そんなショックではなかった。そう、だから今頃彼の件について書いている。いや、ちょっと違う。本当はこうだ。別に書かなくてもいい……と思っただら何か徐々に淋しくなってきた。……と、これが彼の味、魅力なんだろう。ビートルズの全アルバムから彼の楽曲を消し去ったとしよう。それでも、ビートルズはちゃんと存在する。あるいは彼のギターパートを仮にジョンかポールがやってたとする。それでもビートルズは立派に存在していたらう。（これらはジョンも一九八〇年のインタビューで言っている）とはいえ、事実として、確実に彼はその中でオーラを放つてはいた。彼同様、地味ながらもジョージファンもいた。（特に日本ではビートルズ時代、他国のそれに比べ多かったんだと。分らないでもない）では、そのオーラとはどんなものだったのか。今回は考えてみる。そして、ジョージへの追悼にする。

「フニャ。」これが、僕を感じるジョージである。あの頼り無さそうな笑顔も確かにそうだが、詞曲、ギター、言動、クラブトンとの関係、すべてからして。

詞。楽曲名からしても明らかに、間延びしている。『アイ・ウォント・トゥー・テル・ユー』『君に伝えたい』『イフ・アイ・ニーデッド・サムワン』『もしも彼女がほしくなったら』『ウイズイン・ユー』『ウイズアウト・ユー』『君の内側で、君の外側で』『ロング・ロング・ロング』『ザートと、ザートと、ザートと』『ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィーブス』『僕のギターが涙を流している合間に』『アイ・ミー・マイン』『僕が？僕を？僕のものなの？』『サムシング』『何が』『ピア・カムズ・ザ・サン』『ほら、陽が昇る。フニャって。どつか間が抜ける。』

ジョンと比較してみよう。『ヘルプ』『救つてく

れ』『ライム・ア・ルーザー』『オレは敗北者だ』『ガール』『女の子』『レイン』『雨』『トゥモロウ・ネヴァー・ノウズ』『明日のことは分からない』『レヴォリユーション』『革命』『アイム・ソウ・タイアード』『すごく疲れている』『ドント・レット・ミー・ダウン』『落ち込ませるな』『アイ・ウォント・ユー』『アイ・ウォント・ユー』。そのまま図星。

曲。実はジョージの曲は、特に中〜後期はボールのベースがやたらとカッコいい。『タックス・マン』は言うまでもない。『ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィーブス』なんか、今でも聞いてて鳥肌が立つことがある。（お酒でぐるぐるしてる時にヘッドホンつけて、重低音を強めて音量を限りなく高めて脳をそれにまかせてみれば、一発！ストーンアウト）『アンソロジ』で、素のままのものが入っていたが、確かに綺麗な曲ではあるが、ポワッとした、しまりに欠ける○○○みたいなものだった。それにまさかあのタンゴみたいなリズム隊を合わせ、あそこまで締まりがよくなるなんて奇跡的だ。たぶんあの時期のポールならどんな女だっただけでイカせていたかもしれない。『サムシング』はもうジョージの代表曲でもあるが、あのジョージの粘っこさをきれいにポップにしているのは、またまたベースである。ポールはやはり改めて天才だと感嘆する。とまあ、ポールコナーになったが、つまり言いたいのは、それだけジョージの曲はスキがあるということを言いたいのである。ここでもフニャってるのである。

言動。ジョンのインタビュ（一九八〇）より。『オレが美術学校に通ってた頃、シンシアとよくデートしてたら、とにかく後ろからジョージがついてくるんだ。おれにはそんな取り巻きが多かったけど、やつはしつこかった。映画館の中まで来やがった。なんだって言ったら、バンドに入れてくれだ。それで仕方なくメンバーにしたんだよ。』いまでいうストーカーもどきだ。フニャってはいらるが、かなり粘液質。もつとあとで、実録映画『レット・イット・ビー』でこんな有名なシーンもある。ポールにギターパートで「こんな感じでやって欲しい」と言われ切れてしまう。その切れ方がまたまた情けない。「分かった、おまえの言うようにやるよ。弾くなつて言うなら弾かないよ。」だと。頑張れ、ジョージ！意地悪ポールに負けるな。

クラブトンとの関係。パティという、滅茶苦茶か

わいい女房をクラブトンに取られた。そのくせ、ずつと、クラブトンとは親友であったという、有名な話。実際、最後のツアーとなった九三年のジャパン・ツアーでも彼がサポートメンバーやってた。これはよく、「なんという男の友情だ」といって美談で語られるが、果たしてそうか。僕なんか、心が狭いのだろうか。少なくともそんなやつとは一生口きかない。もしジョンがヨーコをそんなされていたら、多分、刺していたと思う。ここでもフニャってるのである。

これが、僕を感じるジョージ。これが感じるオーラ。情けないのはあるが、ピュアです。そしてそれは放つて置けなくする何かを持っているんでしょうね。それで、ジョンとポールも気付いたら、面倒見るはめになっていたんでしょ。そう、僕だつて気付いたら、彼がいなくなつて淋しくなっていた。ジョージ、お休み。

あなたの平穏な生活を脅かすストーカーを本場米国で培った最新の技術と装備を駆使して退治します。あなた一人で悩まないでください。

フリーガン対策指導いたします



販売用品防犯
策指導も致
します。

相談無料
秘密厳守

tora@pda.co.jp
produced by
P.D.Agency
1843 N. Cherokee AVE: APT. #216
Los Angeles: CA 90028, USA
voice : +1-310-493-1001
facsimile : +1-323-466-5645

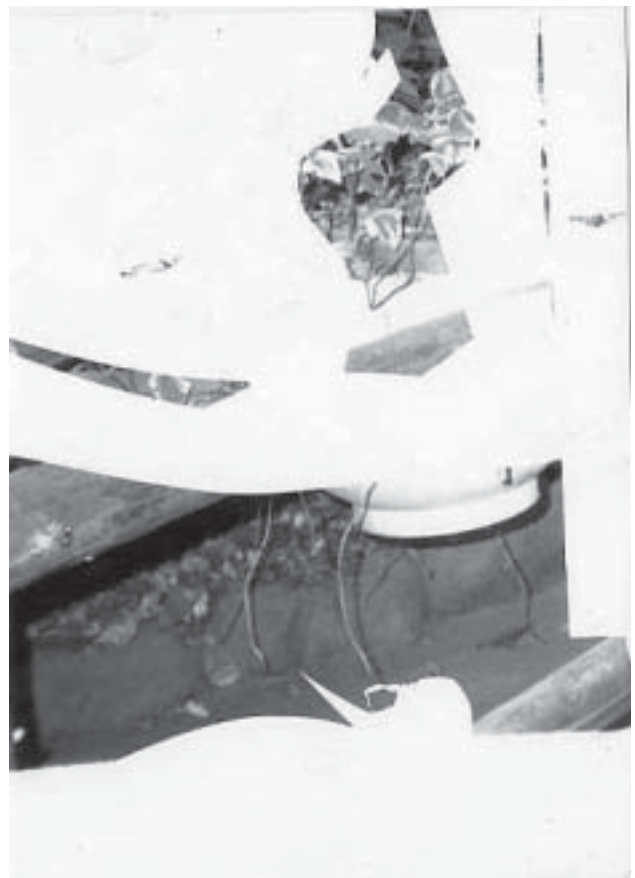


『ズット、ママ、ジユウノ、ワタシ』

Rei's Gallery

近頃、どつぷりと写真にハマっています。
 今月と先月と写真の作品を掲載していますが、
 タイトルのトリックに気付いてもらえま
 したか？ 一つの文章の文節を区切って、並び変え
 ると奇妙な文章になったり、違う単語が生まれ
 たりするでしょ？
 写真にも、風景と、イメージされた形を重ね合
 わせて隙間を作り、また新しい形を生まれさせ
 ました。その形がまた別の何かに見えて、どこ
 までも連想させてくれる。あなたには何の形が
 見えますか？

『コト、ワスレル、ダイジナ、カラ』





Books

『こくろう物語』

鈴木扇二

青林工藝舎、

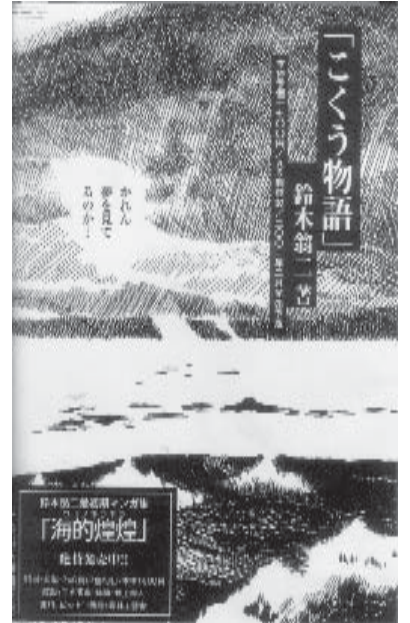
2002年

これは、うそつき太郎が狐の啼く夜、おねしよで書いた物語。どこか知らない山里の、雨上がりの夕方の、誰かと見上げた藤色の空の漫画。

いつか君の泣き寝入りの晩、鼻提灯のその枕元で紙ボツチャン達が演じた軽演劇。遠い北の寂しい浜で見つかった行路病者の解剖の、その網膜に焼きついていた光景。「山師ですよ、田舎廻りの・・・」

『こくろう物語』は昔、鈴木扇二が渾身で描き綴りながら、描き終えることのできなかつた長編漫画である。

それは一人娘を惜しんで嫁にやれぬ愚父の心だつたらうか、埃が積もり変色するまで秘蔵されてきたが、しかし未完であればこそ作者自身にインスピレーションを放射しつづけ、他の名作群の母体となり、それでいて二十年間些かもその霊力を減ずる事なく息づいて来た。



それがどうという風の吹き回しか、今回めでたく完結したという。(しかもまたもや改変され、ツギハギをされて。嗚呼!) ホントかね? そんな事が出来るのかね? 昔、扇二は頁をめくるそばから消えていく、そんなインクで描かれた漫画について書かなかつただらうか? そんな一期一会印のインクで描かれたこの漫画を、仮令作者とはいえ勝手に書き変え完結させる事など出来るのだろうか? 否、そんな事は僭越というものだ。何故ならこの漫画、読んだそばから消えて行き、読者一人一人の記憶となり、反芻され、改竄され、思い思いに書き継がれていく永遠に未完の物語だから。君も僕もうそつき太郎だし、おねしよは遂に治らないから。

「姉? 一人で苦勞させてしまつた」

『こくろう物語』これは人生が後悔と愛惜に満ちているように、取り返しのない漫画だ。

願わくは若い人、この傑作が君の苦しい夜の伴侶になりますように。

(未完)

(白山宣之)



『Contrasenso / Paulinho Moska』

EMI Brasil、1997年、

856849 0



CDs

ICQというインターネット上のシステムがある。世界中のどこにいても、お互いがその瞬間にアクセスしてさえいれば会話が楽しめる、というような仕組みである。ばか話に興じることも可能だし、仕事の打ち合わせにも使える。いろいろな国の人々と気軽に情報交換のできる場である。

そんななかで、知り合いになつたブラジルの少女、ヴァネッサがいる。彼女から薦められて入手したのがこのアルバム。ブラジルの音楽、日本で紹介されるものは、著名なアーティストやマニア向けのものばかり。それとは異なり、十八歳の女の娘が普通に聴く、いわば、等身大で接している音楽に触れることができたのは幸いである。

けれども、その中の多くは、アメリカの大手のお店でも入手不可能であつた、という残念な側面も。インターネットがどんどん盛んに

なつて、情報交換が進んでも、各地の音楽の实物を入手するのは意外に困難な状況がまだ暫くは続くのかも知れない。肝心の内容だが、これがなかなかのもの。よく知られているブラジル音楽の要素がベースにあるもの、イギリスやフランスの音楽の影響を受けているのは明らかで、微妙なポップ感覚が漂う。新しい世代のブラジリアン・ミュージック。きれいなメロディーに飾らない唄い方、快適な空間だ。

(全太)



London Report

夜に遊ぶ場所といえはバーやクラブ、カジノなどがあるが、その他に夜のイメージと重なるものといえはやっぱりクスリだろう。日本でも若者を中心にけっこう流行っていたような気はするが、イギリスでもエクスタシーなる物がクラブシーンを中心にかなり流行っている。もちろんこれは非合法のクスリで、見つければ御用となってしまうのだがクラブ内ではそんなに厳しくもない。錠剤錠の物が普通で、取るとハイになるらしいのだが、これをやると瞳孔が開くので大抵やっているかどうかはすぐ分かるのである(態度や挙動などもその大きな要因ではあるが)。ほとんどの場合が黙認さ

夜の街／お菓

エトワール

(Tout près des étoiles)



2000年公開

三月三十日より渋谷東急文化村にて上映

監督・撮影：ニルス・タヴェルニエ

出演：マニユエル・ルグリ、ニコラ・ル・リッシュ、

オーレリ・デュボン、

ローラン・イレール、

エリザベツト・プラテル、

藤井美帆



統を感じとることができない。フィルム自体、なんらのストーリーがあるわけではないので物足りなく感じる向きもあるかもしれないが、逆に、そこから

Étoile

エトワールとは、フランス語で星、ここではバリオペラ座バレエ団の最上位、主役級のダンサーのことだ。オペラ座三百年の歴史において、はじめてその舞台裏にカメラが持込まれたということのようだ。しかも四年間の交渉の末に、

世界の第一線で活躍する振付家とのリハール風景やかつてのエトワールたちが教える日々の練習、多くの団員や指導者のインタビュー、そして実際の舞台の様子などがカラーージュされている。

オペラ座の歴史をひもとくというものではなく、現在を描写することで、築き上げられた伝統を感じとることができる。フィルム自体、なんらのストーリーがあるわけではないので物足りなく感じる向きもあるかもしれないが、逆に、そこから

(篠崎健一)

何を感じとるかはスクリーンのこちら側次第というところだ。ダンサーの鍛えられた身体は美しく、映像も美しい。

エトワールという最高位を皆が目指す競争のなかにあつて、あるいはだからこそ、彼らの人間的な逞しさや愛情が伝わってくる。ひとりひとりが主役なのだ。その彼らが集まってひとつの舞台をつくりあげる。ある団員は修道女になることが夢だったと言いが、ここはまさにバレエの修道院のようなものかもしれない。そのようにして研ぎ澄まされた技術と精神が、かくも優美な表現を可能にする。

古典バレエにとどまることなく、モダンダンスのように積極的に現代の舞踏をとりいれているという紹介も、パリという街やフランスという国を象徴しているようである。そしてこのような舞台が、この映画を日本で見るのと同じようなお金を支払うことでも、観ようと思えばみられるのである。

れていると言った状態で、直接にそれを取っているところや、売り買っているところをスタッフやセキュリティに目撃された場合のみ、そのクラブから退去させられるぐらいだ。後は取り過ぎて動けないぐらいにぐったりしてするような奴も連れ出されているのを何度か目撃したが、まあ当然といえば当然だろう。そんな客を狙ってか、朝の四時、五時頃からオープンするクラブなんかもあるから驚きだ。これは当然その他のクラブが終わった後に流れてくる客を狙ったものなのだが、だいたいそんなに長くクラブで遊べるものではない。九十%以上の客が何かしらのクスリを取っている。まあ、そのクラブ自体はすごく有名で音楽も面白いと評判なので、それにいくために早起きして行く人もいるようなのだが、やっていることは同じ。他には昼頃からオープンし、夕方までと言ったクラブもあるらしい。自分の感覚だと、クスリも含めたか夜遊びにそこまで気合を入れたいやる気にもなれないので「随分と難儀なものだなあ」と思ってしまう。

このエクスタシー、以前はそのようなクラブの中心で普通に買えたらしい。売るためのテーブルがクラブ内に有り一粒約二〇ポンドぐらいで堂々と買えたという話だ。今では未端価格一〇ポンドぐらいで、クラブの中でディーラーから買えるのだがそんなに堂々と買うわけには行かない。ディーラーと顔見知りであればそれよりも安いらしい。にしても、始まりの値段は五〇ポンドすら高くても一ポンド以下だというから随分と荒稼ぎしてるものである。もっとも始めに仕入れる人は何千コと仕入れなければ話にならないので、払う額はそれなりにはなるのだろうが、自分の知り合いから聞いた話によると、昔は飲酒運転で警察に取り調べを受けた際に一〇〇粒エクスタシーを持っていったが何もおとがめは無かったらしい。このドラッグの所為で何人も人が亡くなっているのだ、今では厳しくなったとはいえ、これだけ流行っているものなずける話である。ちなみにイギリスはドラッグでの(種類は問わず)死亡者の数はEU内で一番。次がドイツ、イタリアの順だが、三位のイタリアに上ったってイギリスの半分以下なのだからその数はだんとつである。中毒者の数になるとポルトガルが一番で次がイギリス。こちらは人口に対する%での数字。

のかと言うと立派にクラスAドラッグなのである。これはコカイン、クラック、ヘロイン、LSD、マジックマッシュルームと同等のクラス。他には覚せい剤系(例えばスピード)などを注射器用(タブレットもある)に用意していた場合もそう。自分で使うために所持していた場合は七年間の服役か罰金、売るためにと見なされた場合は終身刑か罰金なのである(双方共に場合によっては刑服役と罰金)。しかし、初犯で自分で使うために幾つかのエクスタシータブレットを持っていたくらいでは起訴されないのが現状らしい。それもそのはず、やっている人口が多すぎる。だいたい何処ぞかのお偉いさんが公式なコメントで「ナイトクラブへの手入は時間の無駄であり、コカイン、エクスタシーのウイークエンドユーザーには彼らの行動が無害に近いものから、余り重きを置いていない」とのコメントを発表しているぐらいなんだから、それもそうかと納得してしまう。ちなみにコカインはもっと高く、未端価格で一グラム五〇〇六〇ポンド。ついでに大麻についても最近随分と緩くなりつつあるらしい。まだ改正されてはいないがクラスCに格下げの話が出ている。これについてもやはり同じ理由からだろう。

(神山)



長井理佳

『ツバキ』

冬が近くなりました。お日さまに近い、海辺のこの街にも、冷たい木枯らしが吹くようになりまし

ました。マリコは、押し入れの茶箱の中から、厚手のセーターを出しました。すると、いっしょにおかあさんがあんでくれた、空色のマフラーが出てきたのです。

「わあ、これ、気に入ってるんだ。」マリコはマフラーにほおずりました。マフラーには、虫よけの薬のにおいがしみついています。

「お日さまに干しておくといいな。」とおかあさんが言ったので、マリコは、縁側の田だまりにマフラーを置きました。

2時間もたったでしゅつか。マリコはびっくりました。誰も見ていないあいだに、マフラーが半分ぐらいに短くなっていたのです。よく見ると、はじっこがほどかれていたのではありませんか。なんだか知らないけれど、短くなつたマフラーのそばには、きれいなツバキの花が三つおいてあります。落ちていたのをひろって来たようです。

「あたしのだいいいなマフラー...」
「あたしの泣き声でなりました。」
「マフラーを半分だけとって行くのぼつなな

て...」
マリコは、どうしても、どういふわけなのかが知りたくなりました。そして、よく考えたあと、もう一度、マフラーをそこに置いておくことにしました。

次の日、マリコは縁側のすみっこにすわってじっとマフラーを見張っていました。風もなく、おだやかないいお天気でした。お日さまはぼかぼかとマリコをあたためます。

「ふわわ...」
「思わずあくびが出て、マリコはあわてて口をおさえました。」

「だめ、ぜったいに、はんにんを、つかまえます。」

でも、そのあと、あつと一瞬間にマリコはつたたねの国に落ちこぼれて、目がさめた時には、マフラーはもつと短くなっていました。

おまけに、今度は、葉っぱのついたツバキの花が一枝、おいてあります。

「こんぎつねみたい...」
「こんどこそ、どんなにあつたかかたつて、ねないから...」

次の日、マリコは、庭におりて、木のかげにそつとかくれました。さいわいに、曇っていて寒い日だったので、寝ようと思つたつて、ぜんぜん眠れませんでした。

「どれくらい待っていたでしゅつか。」
「耳までつめたくなつちやつた。もう、うちに

入るうかなあ。」
そつ、思いはじめたころです。
「一匹のりすが、ちゅこちゅこをやつてきたのです。」

りすは、きよきよとあたりをうかがいながら、縁側の下の、くつぬぎの石の上のぼりましました。そして、ひよいと飛び上がつて縁側にあがる、なにもやら三角の木の案をいくつかにそこに置きました。

それから、マフラーにかけより、毛糸のはしっこを見つけたすと、器用な手つきで引っぱつては、ほどいた毛糸で玉を作りはじめました。それが、あんまりくるくるとじょうずなものですから、マリコは、自分のマフラーがどんな短くなるのも忘れて、見とれてしまいました。

やがて、毛糸の玉は、りすの頭より大きくなり、両手いっぱいになり、とうとう持ちきれなくなりました。そして、マフラーも、ちゅこちゅこ、すっかりなくなりました。

りすは、ほつといきをほくと、毛糸のはしっこを、ほどけないようじゅつすに玉のどこかにはさむと、ころころところがして、縁側の、くつぬぎの上までやつてきました。

マリコは、思わず一歩前に出ました。
その時です。マリコの目と、りすの目が、ぴかぴかと合ったのは...。

りすは、凍りついたように、大きな目でじーっとマリコを見つめました。マリコは、なんだか、こつそりいたすらをしていたところをみつかったように、気をつけの姿勢のまま動けなくなりました。

すると、りすは、ばちばちちちとまはたきををしたのです。まつ黒で、ぬれたような、木の実みたいな形の目です。長いまつげがぱしぱしとゆれると、魔法の粉がきらきらとちるよう、で、マリコは、思わずうつとりました。

その瞬間、りすは、毛糸の玉といっしょに、ぴょん！と飛び下りました。とたんに、マリコの魔法も、ぱつととけました。

「りすは、ちゅこちゅこ...」
りすは、よほどあわてていたので、しゅつ、勢

いあまつて、くつぬぎの石の上から毛糸の玉といっしょに地面に落ちこちました。そして、そのままだかなくなつてしまいました。

「ちゅ...」
マリコは悲鳴をあげました。
「どうしたの、だいいいぶつ...」
のびているりすをひろいあげて、手の上に乗せると、りすは、ちゅこちゅこ目をつけてマリコを見ましたが、またきゅつとつづいて、

「うん...」
と、うなりました。それは、本当に具合が悪そうでしたから、マリコは、りすをびっくりさせたことを、とてもいけなかつたと思ひました。「ごめんさい。毛糸を取られたくらいであんな大きな声を出しちゃつて、最初からあげればよかつたのよ。」

すると、りすは、またつす目をあけて、
「そ、それ、ほんと、ですかしら。」
と、弱々しい声で、いいました。

「うん...」
なみだをふきながら、マリコが答える、りすは、マリコの手の上で、ぱつと起き上がりましました。そして、胸の前でしゅつぽをだくと、早回しのテープみたいな勢いで、しゃべりはじめました。

「ほんとにありがとうとついでいいます。ほび、これからとんとんきむくになりますでしゅつか。うちにはまだ、しゅつぽの毛もそろわないらつ子がおりましてね、これがまた、やんちゃ坊主におてんばむすめで、寒い日も外をかけまわつて、もうたいへんなんです。はだかんぼうのまま、北風に吹かれたんじや、あなた、あつという間にかぜを引いてしましますわ。そんなところへ、このすてきな毛糸を見つけてましてね。出しっぱなしになつていたし、ちゅつとはいしゃくして

もいかしら、つて。ええ、そりやもつ、かわいいいぼつとマントができましたのよ。あつ、つあめは終わりなんですの。」

「一気にしゃべり終わると、りすは、まうすつかり元気がなつていました。」

「出しっぱなし」ところは、ちゅつとちがつと思ひましたが...。それよりも、マリコ

はおそひの毛糸のぼうしとマントをつけた五つ子の子りすとつのが見たたくたまらなくなりました。

「りすの子つて、かわいいんだろつなあー。」

「ええ、そりやもつー。」

りすは自慢げにいました。

「いいなあー。毛糸はもういいから、見せてくれないかなあー。」

すると、りすは、にこにこしていたのをぱつとやめて、また、じーっとマリコを見つめました。ながいまつげが、ばしばしと動きまじつた。ながいまつげが、ばしばしと動きまじつた。「ひみつですよ。だれにもおしえちゃだめですよ。」

りすは、まじめな顔で言いました。

「とくに、人間の男の子なんかには、おしえたりしないでしょね？」

男の子にりすの家なんかおしえたら、たいへんなのは、マリコにもわかります。マリコもまじめな顔で、きつぱり言いました。

「約束するー。」

「それじゃ、わたしについて来て下さい。」

りすは、そついつと、びよんと飛び下り、毛糸の玉をころがしながら走り出しました。あまり速くて、ついて行くのがたいへんでした。

やがて、裏庭の大きな古いツバキの木の下に、りすと、りすは、毛糸の玉を根元のあなに押し込みました。それから、さっさーっと登って行ってしまいました。

ツバキの木には、少し早い花がたくさん咲きはじめています。砂色のすべすべしたみきには、マリコは登れそうにありませんでした。

ずっと上の、太い枝が分かれたところに、ちよつどいいいろが見えます。その中で、ちらりと茶色いしっぽがゆれました。

「へえー。こんなところにおうちがあったんだ。」

感心しながら、しばらくまわっていると、上の方で、キィキィビィビィとにぎやかな声がかました。そして、木のつるの中から、次々に、空色のぼうしをかぶり、空色のマントをかけた小さなりすたちが出て来て、太い枝にならびました。



「べつじよつ、なんてあいさつじよつか。」

「とつてもあつたかいです、ありがとつてい

えはいんだよ。」

もしもしながら、こりすたちはびよこんとおじぎをしました。おや、一ぴきだけ、一番小さいりすは、ぼうしをかぶっていません。

「ほくのぼうしは、まだあんでもらつてないの。」

そのりすは、つまらなそうにいました。

「だじじよつ。今日、ちゃんとしたいたか

らね。おまえにも、あんであげますよ。」

りすのおかあさんは、そついいました。小さいりすはうれしそつにびよんびよんはねま

した。

それから、みんな、じゅんばんに、地面まで

おりてきました。

りすたちは、地面におりたのがうれしくてたまらないのが、とんだりはねたり、とんぼがえりしたりして、遊びはじめました。でも、毛糸のぼうしもマントも、とてもちよつどよくあ

めていましたから、一つも落つこちたりしませんでした。

それから、ツバキの木の下にすわつて、マリコはりすたちとしばらく遊びました。りすたちが一番よろこんだ遊びは、指人形でした。マリコが、ゆびに小つちやなぼうしをかぶせて、

「こんちはーほく、りすだよー。」

と、やると、みんなはもうおなかを抱えて笑つ

のです。とつとつ、マリコは、自分で作つた

りすのおつかい、というのと、「りすのしつ

ばい」という劇を、十回つつやらされました。

その間に、おかあさんりすは、最後のぼうしを

すつかり編みあげました。

にほんとうによく似合つていました。

「これ、一番よくなるふえだよ。ほくのたから

ものだけ、あげる。」

一ぴきの子りすが、マリコに小さな木の実を

くれました。三角で、角に穴があいていて、中

はからつぽです。

「これ、何の実？」

「へえ、しらないの。これ、ツバキの実だよー。」

りすたちは、ツバキの実のふえの吹きかた

を覚えてくれました。

ピーッ！ すきとおつた音が、冷たい空気に

ひびきます。

しばらくすると、りすのおかあさんが言いま

した。

「さあ、そろそろ夕暮れですよ。みんなお家に

帰りまじよつね。」

「またね。」

「またね。」

りすたちは、木の枝の上でぼうしをぶつて

見せてから、穴の中に消えました。

あたりはしーんと、きゆうに寒くなつた

ようでした。

さつき、縁側にりすが置いて行つたのは、ツバキの実だつたのでした。マリコは、りすたちにおそつたように、木の実の角を石でこすつて穴をあけ、中をほじくりだして、ふえを作つてみました。ピーーならしながら、ポストをのぞくと、スーちゃんから、手紙が届いて

いました。

「マリコちゃん、お手紙ありがとつ。」

いつも、すてきな家庭の話、たのしみにして

いるよ。

わたしも行ってみたいなあ。そんなお庭がある

なんて、うらやましいなあ。」

スーちゃんのうちは、ピルの三階で、ペラ

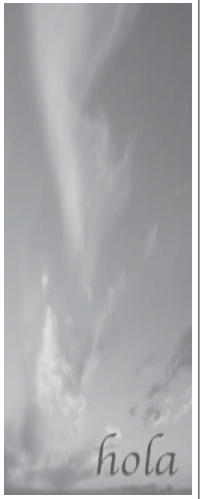
ンダしかないので、マリコは、すぐに、返

事を書きました。

もちろん、できたてのツバキのふえもいっ

しょに入れて、いつものように、ポストにこ

とりと落としてました。



カタルーニャの旗は、FCバルセロナのユニホームそのものである、というよりはその逆である。

日程をわりやりこじ開けて、ノウ・カンブスタジアムに突入した。チケットは、当日券で窓口で買って約六千円もした。せいぜい三、四千円くらいだろうと思っていたので結構するものだ、こうしてフットボールはビッグビジネスになっているのだなと思いつながら、スタジアムのスロープをあがってゆく。試合は、今思えば、カルピンやモストボイラロシア勢のいるセルタ戦だった。(実際セルタは強かったのだ。)

割り当てられた席にたどりつくところこそは最上階、まだ明るいバルセロナの空が随分と近くに感じられた。下の方の良い席は、すでに売り切れということだが、空いてるじゃないか。そちらのほうに熱気も充滿しているようだ。

見回してみると、僕の席の周りには五十過ぎのおじさんや、きつと六十や七十を越えてるだろう老夫婦が品のいいコートにスカーフを巻いて座っていたり、それも一組や二組ではない。年若い父親とその息子みたいな組合せもある。若い熱血サポーターというのではないけれど、ずつと小さいときからのこの街でおらがチームを応援してきたというようなひととびとばかりなのである。とても日本では考えられないような光景ではないだろうか。野球でもどうだろう。フットボールが、この街のなかに深く浸透してるのだということに改めて感じる。ありきたりではあるが文化そのものなのだ。

FCバルセロナやレアルマドリッ



ドなど、今こそ日本でも簡単にテレビで試合を観られるものの、その昔はサッカーマガジンの誌上で、クライフとネットワーが胸ぐらをつかみあっている写真くらいでしか知ることのできない、遥か遠く異国のこと、日本で行われている蹴球というものと、これらのフットボールとはどうも異なるスポーツなのではないかと思ってしまうほどの、遠い憧れのようなものがあったのだ。それがどうだろう、その実力はともかくとして、この国でワールドカップが開催されるなどということ、その舞台にこの国の代表チームがでるということをどう理解したら良いのか。こういう時代環境のなかで育つ子どもたちにとっては、きつとこれがあたり前のことだということになるのだろうけれど。いったいそうすると、我々と子どもたちと共有するものとは何なのだろうか。

こバルセロナでは恐らく、世代を超えて共有するものがあるのだろう。そうでなければ、七十を過ぎた親とその子どもが一緒に最上階の席で、ひとつのゴールに近づくと席から身を乗り出し、キーパーの

ふつうのひとびとの心が、芸術的であればあるほど、その都市は美しく重層的になるのだろう。

学生の時の旅行でフィンランドも訪れた。アルヴァ・アアルトという建築家が好きだった。その作品である集合住宅を見て帰



な土壌がこの国の教育だけのみならず文化のの背景には存在しなかったということだろうか。少なくとも、われわれが生きている「最近」において。(篠崎健一)

りのバスの中で、小さなまだ小学校にも行かないような子どもが、建物を指さして「アアルト」と言ったのには驚いた。日本の子どもが、新幹線とかぶーぶーなどと指さして自分のお気に入りを見つけたときの喜びを素直に表現するように、その子どもは一番身近な親にアピールするように「アアルト」と言ったのだ。こんなこと日本じゃ考えられない。東京タワーとか金閣寺とか、教会とかオリンピックピクブルとは違って、それを創った芸術家の名前は言わないだろう。

そういえば、かつて小学校から高校まで美術の教科書のなかで、あるいは社会の教科書の中で、建築や都市に関する記述やそれらをつくった人について、読んだ記憶がないのは、単に覚えていなかったからか、はたまた、そのような

アクアネット
Let's mind the harbour!

湊文社
SOBUNSHA

WHY DID THE CHICKEN CROSS THE ROAD?

そもそも“Why did the chicken cross the road?”という問いを誰が言い出したのはわからないが、発信元は英語圏、たぶん米国で、ネット上ではずいぶん前からあるジョークだ。プラトン、アリストテレスからブッシュ、フセインまでさまざまな名人にその答えを語らせて楽しむという趣向である。

ただしこのジョーク、その人が誰なのかわからなければ、またどんなキャラクターでどんな発言をした人なのかわからなければ面白くも何ともない。たとえばこういうのがあった。

Doctor McCoy:

For god sake Jim, I'm a DOCTOR not a farmer !!

Jim Kirk:

Because OTHERWISE total ANNIHILATION of the PLANET was at STAKE !

Mr Spock:

I'm afraid I do not see the relevance to the question at hand, HOWEVER, fascinating.

ドクター・マッコイ:

神に誓って、ジム、私は医者だ、百姓じゃないぞ!!

カーク船長:

だって、そうしなければ惑星は全滅するところだったんだぞ!

ミスター・スポック:

いまのところその質問との関連性は私には認められませんが、しかし、惹かれますね。

いずれも各登場人物お決まりのセリフなのだが、“Star Trek”を一度でも見たことのない人にはちんぷんかんぷんだらう。

それにしても、なぜムネオくんはあんなことをしてしまっただらうか。

ホトトギスA:

殺されたくなかったから。

ホトトギスB:

無理にやらされた。

ホトトギスC:

人を待たせるのが嫌いだから。

など答えは百人百様だろうが、私にはムネオくんがずいぶんな憶病者だったからと思えてならない。上にはひたすら頭を下げ、下には威張り散らすのは、憶病な人のいけない一面である。

ところで、英語で憶病者のことを chicken 二ワトリという。それでは問いをもっと一般的に、

なぜその二ワトリは道を渡ったのだらうか?

としてみたらどうだろう。

ある日の新聞にその答えを探してみた。

アイフル:

はじめてですか?

アンネ・フランク:

お金が欲しかったのね、きつと。

オノ・ヨーコ:

ジョンの遺志に反してなければかまいませんよ。

外務省:

エサをまいておきましたから。

基礎英語:

春になって学びたいことがふえたから。

クマ:

だって、車が走ってないんだもん。

小泉純一郎:

本人の判断ですから、尊重したいと思えます。

琴三喜:

立ち合いから一気に行ったのがよかったです。じゃないですか?

桜: あんまり暖かいんで。

三里塚・芝山連合空港反対同盟熱田派:

老後が不安になったから。

シャロン首相:

露骨に圧力をかけられたので。

スズキムネオ:

あのーそれがなにか、悪いことなんですか。彼らも一生懸命なんじゃあないでしょうか。

聖教新聞社:

平和の種を心にまこうと彼らも願っているのです。

タナカマキコ:

そういう体質なんですよ。

鶏肉:

私は牛でも、豚でもない。

フォレスト・ガンブ:

お母さんがそうしるって言ってたから。

藤原先生:

じつとしてるのもめんどくさいときつてあるのよ。

亡命希望者:

南に着くまではノーコメント。

さらに昔の人にも聞いてみた。

源義経:

大陸をめざすため。

琵琶法師:

諸行無常だから。

徳川綱吉:

生類哀れむべし。

与太郎:

あんただれだい?

夏目漱石:

兎角この世は住みにくいから。

金閣寺:

焼かねばならぬから。

昭和天皇:

あつ、そう。

マッカーサー:

そいつは絶対に帰ってきますよ。

昭和天皇:

あつ、そう。

マッカーサー:

痩せチキンは消えゆくのみ。

海老一染太郎:

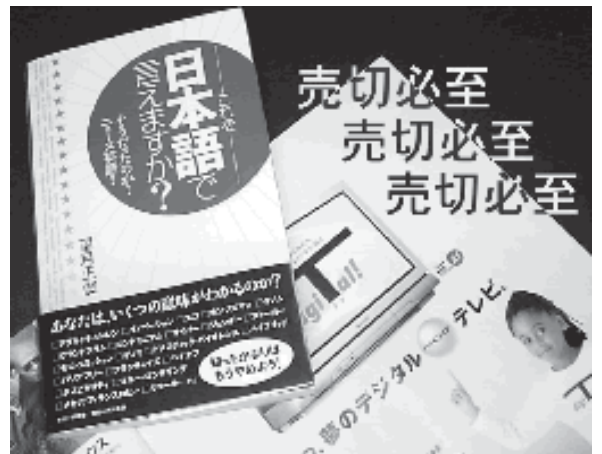
おめでとうございまーす。

等々

それぞれが勝手なことを言いそうで、かえって謎は深まるばかりである。混乱する現代、われわれは誰の言うことを聞けばいいのだろうか。

(望月)

All We Need Is Love



(一面から続く)

らば、まだしもだが、ヨーロッパだけで集まって、他の地域の国々に対する力を強めよう、という印象が強く、美しいものには見えない。

かつて、ヨーロッパは、世界を我が物顔で牛耳って、力によって、はたまた、キリスト教の布教の名の下に、ヨーロッパの見地からすると遅れていた、固有の文化を歪めてしまった、という歴史がある。そのヨーロッパが、今度は自分たちの中の小さな文化圏の相違を飲み込んでしまうような行動に出始めたのだ、と思うのは私だけだろうか。

大昔には、ぼつぼつと存在したに過ぎない、ごく小さな集落として始まったものが、時代を経て、現在の国家に至る過程で、たくさんの固有の文化が衝突してきただろう。時に、混ざり合い、時にはねのけながら。場合によっては、弱い文化は打ちめされ、消滅してしまっただけだ。

文化と文化が出合うこと、そのこと自体は、悪

第2回じょじ伊東プロデュース公演

BABY, オンリー・ユー

4月17日(水)~21(日)

高円寺明石スタジオにて

チケット予約・お問い合わせは

03-5497-4260

joji@kt.rim.or.jp

いことではない。新しい何かが生まれたり、自分たちの文化を見直す大きな機会になる。その一方で、出会いによって、その文化を歪めたり、失ってしまったりする危険性を秘めている。そうなるしまつたら、再生することは非常に困難だ。モノのように、然る可き仕様が有り、それに則って再現することが可能なものではないのだから。

近所を歩くばかりだった私たちが、自転車、オートバイ、自動車、船、飛行機などなどの乗り物のおかげで遠くまで移動できるようになった。電話や郵便、現在ではインターネット、そんなもののおかげで様々な情報を交換できるようになった。私たちは、より多くの未知の文化と接触する機会に恵まれている。結構な話だ。ただ、それだけではなく、同時に、固有の文化を失う危険に瀕している、という事実を忘れないでおこう。

初めて、隣の町へ出かけていったときの気持ち、思い出せるかな。

(全太)

dani

万年筆なら dani

<http://dani-japan.com/>

Ken-ichi Shinozaki, architect

4-3-44-1 Narita-higashi, Suginami-ku,
Tokyo 166-0015,

Voice : +81-3-3220-0644

Facsimile : +81-3-3220-0640;

e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp

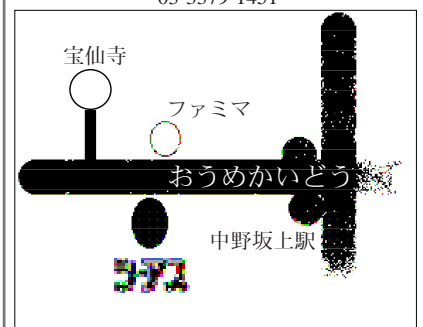
篠崎健一アトリエ

1クラス4人までの少人数制学習塾

ファミマ

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号

03-3379-1451



編集後記

からす新聞第二巻第二号(通巻第三八号)、無事、発刊できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発刊予定日は二〇〇二年三月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。